

西田哲学会会報

第二十号

発行 上田閑照

発行・西田哲学会
千九二九一二六
石川県かほく市内日角井一番地
石川県西田變多郎記念哲学館内
電話〇七〇二八三六〇〇

西田哲学会第二十回年次大会報告

令和四年七月二十三日(土)、二十四日(日)、東京大学駒場キャンパス(KOZUMEBASU)を会場に、第二十回学術大会が、対面とオンライン併用のいわゆるハイブリッド形式で開催された。コロナ禍で二回続けてオンライン開催のため、三年ぶりに対面が実施されたことを一会員として素直に喜ぶとともに、開催校の張政遠先生以下スナップ諸氏への感謝を以て、大会の報告をさせていただきます。

公開講演

初日午後、対面式で行われた公開講演は、ゴリラ研究の世界の第一人者、霊長類学と人類学の専門の京都大学前総長、現在総合地球環境学研究所所長の山極壽一氏、そしてエックハルトを

中心にドイツ神秘主義研究で著名な早稲田大学名誉教授の田島照久氏という、異色の、しかもきわめて興味深い組み合わせの両方によるものとなった。

山極氏の講演「今西錦司の思想に西田哲学を見る」は、冒頭いきなり「哲学の方が今弱っているのではないか」という挑発的な問いかけから始まった。氏は、二十世紀以降の生命科学の進歩と情報通信革命、さらに進行中のコロナ禍についての現状認識を踏まえ、人類の進化過程について興味深い数字データを紹介しながら、文化という観点を作るのは身体のリズムであるとする山崎正和の主張を援用しつつ、人間は五感で社会をつつてきたのであり、言葉に依るの

秋 富 克 哉

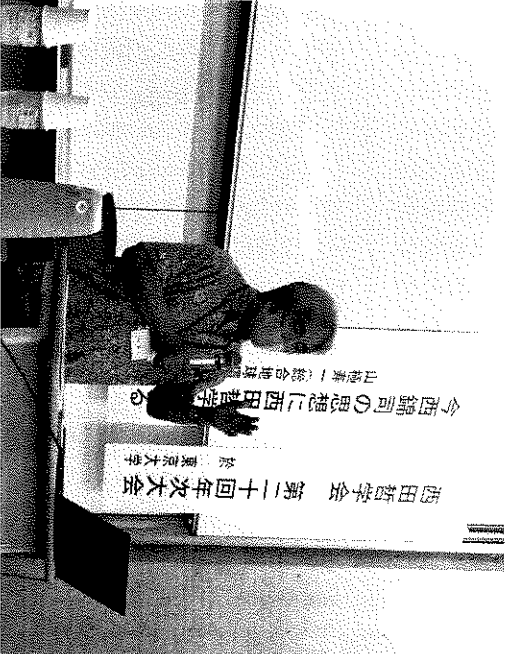
あり、今西の「棲み分け」もその立場に他ならない。

氏は、日本文化が培ってきた伝統に、二つのものに対し、どちらでもなくどちらでもある構造を見る「容中律」の立場、そして自然(動物)と人間の連続性を見る着想を認められる。さらに、今西の二人

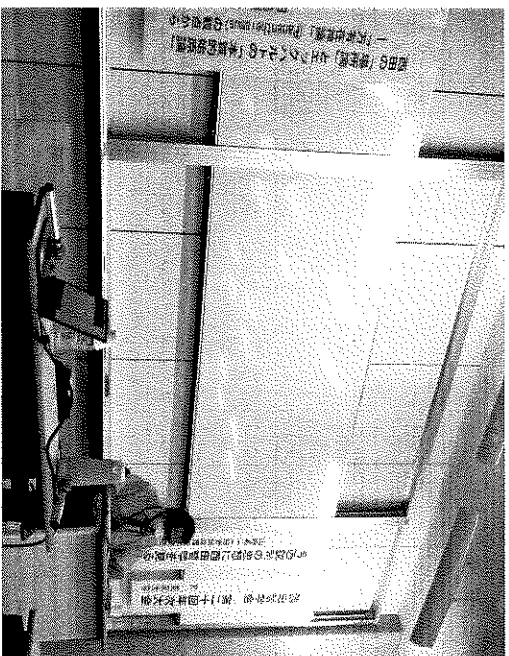
ではないと説かれる。そして、二元論的な近代西洋のパラダイムに行き詰まりを見出すオギョスタン・ベルクが、ユクスキョルの「環境」、西田の「場所」や和辻哲郎「風土」に着目していることをもとに、西田と今西氏は、著作「生物の世界で「すべての生物は社会を持つ」と主張する今西の基本的立場が、「生命が環境を築え、環境が生命を成える」として「行為的直観」を軸に歴史的世界の自己形成を認識を踏まえ、人類の進化過程について興味深い数字データを紹介しながら、文化という観点から、文化を社交と見なし社交を作るのは身体のリズムであるとする山崎正和の主張を援用しつつ、人間は五感で社会をつつてきたのであり、言葉に依るの「間」への着目という共通項が

らに、今西の二人の代表的な弟子、伊谷純一郎と梅棹忠夫とがそれぞれ「文化」と「文明」に着目したことなどを紹介しながら、人間の本質は共食と共同保育を通じて高めた共感力が元になっていくことをもう一度確認すべきだし、環境を対象としてではなく主体との関係で眺める立場から、文化と環境が共鳴し合う

環境倫理が求められると締めくくられた。
続いて田島氏は、「西田の『場所論』とエックハルトの『本質的始原論』——『万有在神論』(Pantheismus)の観点から」と題し、西田が論文「場所的論理と宗教的世界観」で自らの立場を万有神教(汎神論)的な「万有在神論」の観点から探ることを主張とされた。そこで、まずは「万有神教」について、この用語を



西田哲学会 第二十回年次大会
今西錦司の思想に西田哲学
山極壽一 総合地球環境学研究所



初めて用いたとされるトランプ、トランプに影響を与えたブルーム、汎神論論争」を展開したリッスンク、「万有内在神論」を命名したクラウゼの立場をそれぞれ紹介、とりわけブルーノが、「無限球」に比せられる「宇宙の無限」に対し「神の無限」について、神は内在する一切のもののなかに全的に内在するとしたところに「万有在神論」の特徴を確認された。

そのうえで西田の「万有在神論」性格を場所的論理の中に「一単一なる永遠なる今」とし

「一般者の自覚的体系」への展開を考察され、場所の立場における「超越」と包摂判断の「包摂」とが万有在神論の主要契機だとされ、「無限球」の比喩で語られる「絶対現在の自己限定」としての「歴史的世界」を検討された。

ただし、田島氏の「無限球」に比せられる世界が「全体的」「神」

定されるかぎり、それは汎神論的構造を持つことになるのではないかと問われる。さらに「逆対応」において神と自己が対すとされるところ、場所的論理による哲学的立場が宗教的内容に転調しており、哲学と宗教の「無限球」に比せられる過程でその位置づけを考察の捉え直しにも触れながら、西田哲学を「自己知」の哲学として明らかにした。

「純粋経験」から「自覚」に至る過程でのその位置づけを考察の捉え直しにも触れながら、西田哲学を「自己知」の哲学として明らかにした。

「西田前期哲学における『意志』と『身体』——『純粋経験』からの自己限定」に即止め、西田の探求の構造を「一般者の自覚的、叙智的各意識形式として受けける『自覚』を知

ていることは西田の「絶対現在の自己限定」と響き合う内容を持つと締め括られた。

初日の午前中に三名の研究発表が行われた。

まず、邱葵菲氏（立正大学）「和辻哲郎における『開柄』と前期西田哲学との接点——『意志の統一』を手がかりにして」は、表題の課題を、和辻の長編論文「倫理学——人間の学として」とに考察、「善の研究」における「倫理学の意義及び方法」をも

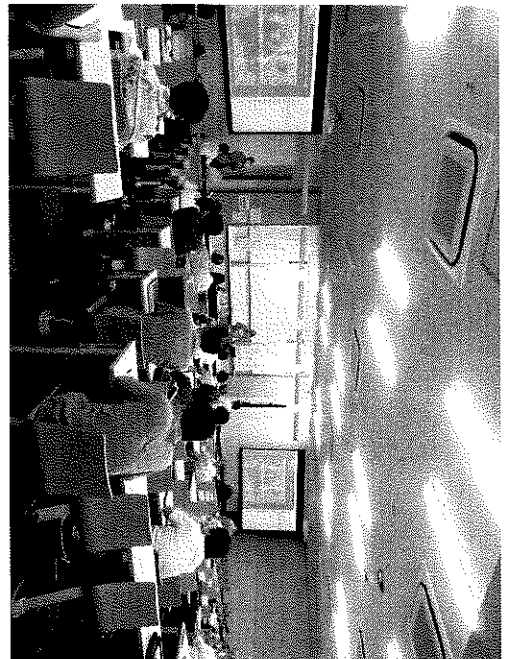
個人研究発表

「絶対現在」と同定されるかぎり、それは汎神論的構造を持つことになるのではないかと問われる。さらに「逆対応」において神と自己が対すとされるところ、場所的論理による哲学的立場が宗教的内容に転調しており、哲学と宗教の「無限球」に比せられる過程でその位置づけを考察の捉え直しにも触れながら、西田哲学を「自己知」の哲学として明らかにした。

「西田前期哲学における『意志』と『身体』——『純粋経験』からの自己限定」に即止め、西田の探求の構造を「一般者の自覚的、叙智的各意識形式として受けける『自覚』を知

「善いヒューニズム」は、三〇年代日本における「ヒューニズム論」の流行と衰退を背景に、三木のヒューニズム思想の特徴を、「危機」の洞察や西田からの影響に言及しつつ、「歴史における人間の行為」という観点から「外への超越（客観性）」と「内への統一（主観性）」の弁証法的統一として考察した。

最後に松本きみみ氏（大阪大学）「西田幾多郎の場所のモダロジ」は「働くものから見るものへの『序』における「東



「一九三〇年代の氏（東北大学）続いて保泉空

洋文化」理解を出発点に「絶対無の場所」や「永遠の今」を考察しつつ、アリストテレス、プラトネイヌス、アウグスティヌス、ライプニッツに対する西田の理解を突き合わせ、後年に至る「自覚」の位置づけを検討した。

第二会場では、二つの英語発表が行われた。まず、Steve Lofthouse氏(ウェスタンオタワリオ大学)「Nishida's Resolute Citique (Philosophy) or Dialogue」は、文化に対する西田の立場を「文化の断固たる批判哲学」として押さえ、文化と哲学の関係を軸に西田の「歴史的世界の原型」や「原文化」などの思想、さらに「媒介の哲学」

二日目の午後「経験の〈場〉」

「善の研究」からの展開」に題して開催された。現在の情勢に配慮し、会場参加式とオンライン式の併用で行った。司会役は本報告を執筆している板橋勇仁(立正大学)、提題者は板橋勇佳氏(明星大学)、安部浩氏(京都大学)。

シンポジウム報告

「経験の〈場〉——『善の研究』からの展開」

板橋 勇仁

二日目の開催という節目を迎えた。そこで、西田哲学の出发点であり、かつその後の展開方向を決定つけた『善の研究』の立場を振り返り、今後この立場からどのような哲学の展開が可能なのか、その意義はどのようなものかについて討議すること

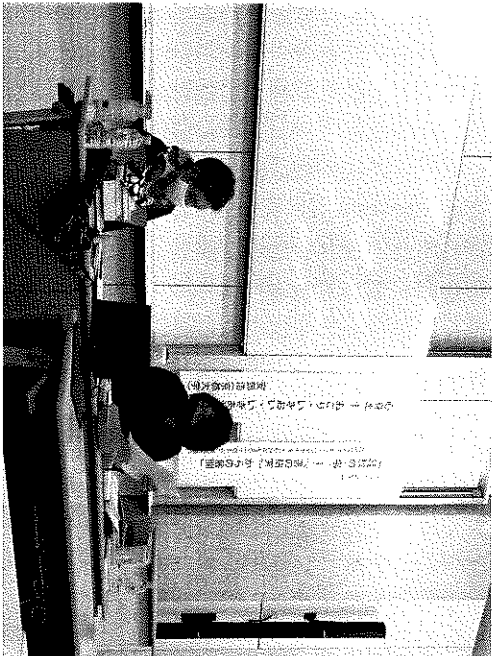
という観点から自己と世界を媒介する「技術」や「言語」を考察し、最後に「無の文化」に基づく「世界的世界」の可能性に言及した。

続いてSoyun P. K CERDA氏(京都大学)「The Conceptual Positioning of Nishida's Reading or Reading of Activity: Considering and Aristotle」は、西谷啓治による西田とアリストテレスの読解から、「中動相」の働きや感覚におけるロゴスを考察、西田

の連続性を明らかにしようと指摘した。

となった。その意図の下、『善の研究』では、『経験』が、いつさいの実在がどこからそこへへと展開するともいへき場として描き出されているという見立てから、『経験の〈場〉』というテーマが設定された。さらに、議論の焦点を「身体」に定めた。『善の研究』からの哲学の展開を、身体を焦点にして討議する試みは新鮮であり、かつ現代的な可能性を有するであろう。当日の各提題の概要を以下に記す。

またそれが根本的に実現するの「技芸」による「回納」である。しかし従来の西田解釈では、身体は自存する事実として理解されていなか。西田は、そうした実現において「自己の身体」の活動が重要な役割を果たすとみなしているもの、立ち入った考察はない。それに対して、後期西田哲学では、「身体」は「歴史的身体」として詳しく主題化される。自己の身体が実在する場合は、既成の現実における



存在者と主体としての「自己」が直接に「活動」をなす制作的行为の中に在る。それは、いまこの場の制作が、能く消滅して繰り返しや情性に陥らない次の個性的な制作を呼び起こす限りにおいて成り立つが、このことは、我々の自己が現在のありようから自分自身で次の個性的な出来事を形作るうとする「我執」が否定されることである。この際、我々の自己の身体は、我執が否定されて自己と他者との連関を実現するその重心であり、この連関を表現する、社会に共同的な「形」である。しかし従来の西田解釈では、身体は自存する事実として理解されていなか。西田は、

「善の研究」から歴史的身体の「形」と題して、『善の研究』で説かれる「経験」を、西田の講義ノートを元に、「一なる場」として考察した。すなわち、日々の経験は、主客が相互に開かれている(一なる場)がそれ全体として個性的で独創的な出来事を創造する「活動」それ自身である。ただし、この一なる場を生きることは、自分を中心にして世界を統御しようとする「主観的自己」の「空想」の否定によって実現する。またそれが根本的に実現するの「技芸」による「回納」である。しかし従来の西田解釈では、身体は自存する事実として理解されていなか。西田は、

常にか身体息づかいや呼吸は、常に社会的であり、自己と他者との関係を重点的に表現している。我々の自己が身体に関わることは、自己と異他的なる他者との関係の統御を否定させる関係に関わることであり、逆に、自己と他者との関係に関わるとは、異他的なる他者をその統御しえない異他性のままに、自らにおいて表現し、包含する「形」を問うことである。

鑄物氏の提題は、「稽古する身体と純粹経験」と題して、『善の研究』における「純粹経験」を、



稽古という文脈の中で考察した。『善の研究』において、純粋経験のあらわれは、なんらかの身体的技術それも訓練の果てに身についた技術を行使していつまり、意識的と無意識的を往復しながら、習慣を積極的に利用した蓄積が必要となる。西田が述べた「体系的発展」(第一章第一編)には、このことが含まれなければならない。またこのことが非熟練者と熟練者の違いを記述することを可能にする。ただその考察のためには後期における歴史性への考察を俟たなければならない。

安部氏の提題は、「心身十におこり・いきおい・いきあわせ」と題して、「経験の場」が、心

すことで、その武芸において基礎的な体の使い方を身につけて、さらには意識せずとも必要に応じて自由なわざを繰り出せるようになることを目指す稽古である。同じ動きを繰り返すこと自体が終わらなき鍛錬である。このように型稽古には、意識的になることと無意識的になることの往来がある。しかしそれは単に往来しているだけではない。意識の統一範囲が深められていくという観点がある。そのためには、①姿勢(どのように立つか)の意味での「構え」を身につける、②シゴト(稽古)と同時に、③シゴト(稽古)を身につける稽古が必要である。つまり、意識的と無意識的を往復しながら、習慣を積極的に利用した蓄積が必要となる。西田が述べた「体系的発展」(第一章第一編)には、このことが含まれなければならない。またこのことが非熟練者と熟練者の違いを記述することを可能にする。ただその考察のためには後期における歴史性への考察を俵たなければならない。

から身へ、そして更には身から土へと漸次開かれ、拡大していく過程を経験の初発と爾後の進展(乃至は深化)として考察し、我々の経験の原初的な生起の有り様すなわち「経験のおこり」とは、自己が自己の意識を意識した刹那の状態」であり、またそのような経験のおこりがそこにおいて認められるような往来がある。しかしそれは単に「経験の場」とは、「直接経験が私の「意識」上に於ける事実の直覚」である以上私の意識(心)である。そして直接経験の特徴は、その時々々の意識内容が緊密な統一の運関に齎される一方で、そのような運関が、「統一作用」によって更なる「体系的発展」を不断に遂げていく点に求められる。『善の研究』では、私の意識の統一作用が、客観の総体である「自然」の統一力に合流することが説かれるが、その合流が私の身体において行われる以上、経験のいきおい(直接・純粹経験の統一作用)の生起の在処もまた、当の身体を描いて他でない。さらに、各人が共に生きることを可能にするよう直接経験の統一作用を「経験のいきあわせ」と呼ぶなら、西田の言う「社会的意識の統一力」の中にそれを認めうる。そ

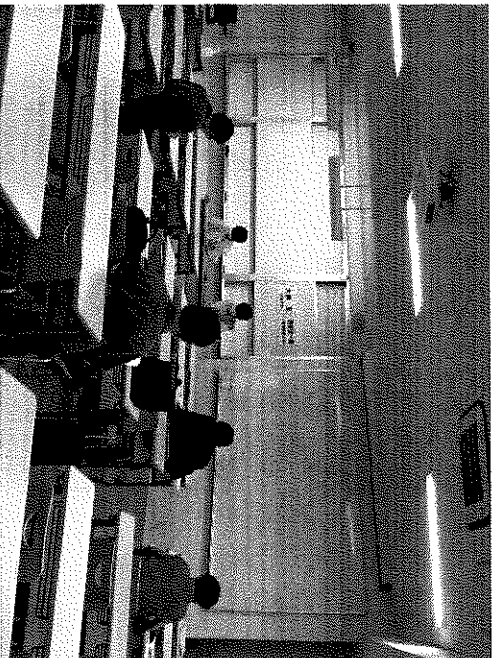
うであるならば、△社会的意識のような処」から「生かされている」という事が成り立つ場」たる△土Vを描いて他にないことが明らかになる。以上の提題のあと、休憩時間を利用して、会場とオンライン上で文面で質問を提出してもらい、質疑応答を行った。無意識と創造性、自然と歴史、身体と自己関係などが議論になった。時間の都合上、すべての質問を取り上げることができなかったのは残念であった。終了後、会場では直接質疑が続いている様子も見られた。

『善の研究』講演会報告
 1-2 実在・8自然-1

一日目の午前に開催の『善の研究』講演会は、研究発表や講演会がハイブリット(対面とオンライン)であったのに対し、対面のみで行われた。その日の東京の気温は朝からゆうに三十度を起え、茹だるような暑さのなか会場に足を運ぶ私は、オンラインを少しうやましく思っていた。暑さのせいかコロナのせいも、あるいは担当者のせい

か、感染対策として用意された広い会場には、ほんの少しの参加者しかいなかった。今回の講演箇所は第二編「実在」の第八章「自然」。担当者は私・大熊玄(亀田医学)と、熊谷征一郎氏(亀田医学)である。二人で前半・後半の内容をそれぞれに解説して質問に应答するという近年の形式を踏襲し、大熊が前半を熊谷氏が後半を担当した。

まずは大熊が全体概要と前半の説明をした。この第八章「自己」は、第九章「精神」と対をなす章であり、テ-ではひとこととで言えば、いわゆる自然物にも実在としての「自己」(統一)がある、ということ。西田は、その自説を述べるため、いわゆる科学的な異説をくり返し登場させ批判するという形で論を進めていく。前章まで語られた内容を自然物を中心に語り直しているので重複も多く比較的阅读しやすい章だが、理解しづらいところもある。



「統一するもの」としての「自己」については説明が必要だ。西田は、第一段落末(二字下がり)で「それ故に自然には自己がない」とするが、第四段落で「自然もやはり一種の自己を具えている」と書く。同じ章の中で「見では矛盾することが述べられているようにだが、これは「科学者」の主張・概念と西田自身の主張・概念が交差しているからだ。その概念がどの立場でどのような意味を含んでいるのか、ほぐしながら解説する必要があることがあった。

この章での西田の主な対話相手は、いわゆる主観が除去された客観的自然物こそが実在であると考えられる人たち(科学者)である。西田は、自然の本体を「未だ主客の分れざる直接経験の事実」と考え、単に客観的に扱われる自然的に抽象的概念にすぎないと言った。田は、そうした「客」を重視する

対話相手を意識してか、「主客未分」よりも「主」を強調する記述が多い。当日がせっかく猛暑日だったので、天気を例に考えてみた。私たちにとって真に実在として天気は、天気図やネット予報でテ-タとして抽出された気温や気圧ではなく、ここで実際に直に経験している具体的なもの状況である。「如だるような暑さ」という情緒的表现も、あるいは詩人による擬人的表現も、西田なら「実在の真実なる説明法」(第二編第三章)だと言ったり、ここでは「自己」とも呼ばれてくるだろう。

西田は、主観性を捨象し客観性を誇示する科学者の言う実在としての自然は、抽象的概念にすぎない、と言う。しかし対話上の役割のせいばかり強調されないが、逆に自然が客観性を除去されて主観のにだけ捉えられてしまえば、それもやはり極めて抽象的ということになる。第三章で称揚される擬人的表現も、その主観性だけが強調されれば、やはり「実在の真実」から遠ざかる。ただ茹だるような暑さ」と言うのではなく、数値も併せて知覚意の合一するところに真の実在があるのだろうか。

次に熊谷氏が後半を説明した。氏の説明は、図版入りの資料によって多くの具体例が提示され、いわゆる客観的説明だけではない、自身の解釈を基礎とした具体的なものだった。印象に残ったのは、その説明で何度か「自己」と呼ばれるが、厳密にはこの「自己」は「単に『発現するもの』ではなく、『発現』するのを『自覚』しているもの」であり、それは「人間」の段階に至って初めて現れる、という。また熊谷氏は、第六段落の一文「我々が能く動物の種々の機関および動作の本に横われる根本的意義を以て直にこれを直覚するるので、自分に情念がなかったならば到底動物の根本的意義を理會する事はできぬ」という箇所を、さまざまな例で説明した(ここが一番おもしろかった)。鷹がカープした長い爪を有すること、子犬が大きな犬を見て震えること、赤玉が白玉にぶつかり動かすこと、赤ん坊が笑いこちらも笑うこと等である。たとえば、我を忘れて赤ん坊を見ていたとき、その赤ん坊のうれしさが自分のうれしさのように感じられる。それは、赤ん坊と自分が「融合」している状態、自分が赤ん坊に「なっている」状

次に熊谷氏が後半を説明した。氏の説明は、図版入りの資料によって多くの具体例が提示され、いわゆる客観的説明だけではない、自身の解釈を基礎とした具体的なものだった。印象に残ったのは、その説明で何度か「自己」と呼ばれるが、厳密にはこの「自己」は「単に『発現するもの』ではなく、『発現』するのを『自覚』しているもの」であり、それは「人間」の段階に至って初めて現れる、という。また熊谷氏は、第六段落の一文「我々が能く動物の種々の機関および動作の本に横われる根本的意義を以て直にこれを直覚するるので、自分に情念がなかったならば到底動物の根本的意義を理會する事はできぬ」という箇所を、さまざまな例で説明した(ここが一番おもしろかった)。鷹がカープした長い爪を有すること、子犬が大きな犬を見て震えること、赤玉が白玉にぶつかり動かすこと、赤ん坊が笑いこちらも笑うこと等である。たとえば、我を忘れて赤ん坊を見ていたとき、その赤ん坊のうれしさが自分のうれしさのように感じられる。それは、赤ん坊と自分が「融合」している状態、自分が赤ん坊に「なっている」状

次に熊谷氏が後半を説明した。氏の説明は、図版入りの資料によって多くの具体例が提示され、いわゆる客観的説明だけではない、自身の解釈を基礎とした具体的なものだった。印象に残ったのは、その説明で何度か「自己」と呼ばれるが、厳密にはこの「自己」は「単に『発現するもの』ではなく、『発現』するのを『自覚』しているもの」であり、それは「人間」の段階に至って初めて現れる、という。また熊谷氏は、第六段落の一文「我々が能く動物の種々の機関および動作の本に横われる根本的意義を以て直にこれを直覚するるので、自分に情念がなかったならば到底動物の根本的意義を理會する事はできぬ」という箇所を、さまざまな例で説明した(ここが一番おもしろかった)。鷹がカープした長い爪を有すること、子犬が大きな犬を見て震えること、赤玉が白玉にぶつかり動かすこと、赤ん坊が笑いこちらも笑うこと等である。たとえば、我を忘れて赤ん坊を見ていたとき、その赤ん坊のうれしさが自分のうれしさのように感じられる。それは、赤ん坊と自分が「融合」している状態、自分が赤ん坊に「なっている」状

態であり、純粹経験（直接経験）と呼ばれる。氏は、そのように

互いの「本に横われる根本的意義が「理會」されるのに必要な、主客ともにある「理」を、わか

りやすく、（共感）（「共鳴、シクロ、同調、同感など」として

以上、担当者として大熊と熊谷氏による解説がなされ、それに質問がなされた。その内容

は「お伝えすると、質問に対して担当者が答えるだけでなく、他の



宿題が残っていた

エッセイ

氣多雅子

（大熊 玄）

参加者もいっしょに考えて説明をしてくれた。問う者・問われる者という二項対立ではなく、ともに西田の考えや概念について考察し意見を交わすという様子、いわゆるレクチャーではなく、対話型のゼミのような雰囲気になったのは、担当者として嬉しく、学びの多い時間となった。そこには、オンラインでデジタルに抽象化されない、直接的でいかに言われたとき、少しでもわかる場所があると思われたのは「善の研究」であり、当時

わかれた。

て三年目、「西田哲学と禅」という論文を「理想」（一九八五年二月号）に寄稿していた。忘れていたのは、この頃私は特に西田哲学を研究していたわけではなかったからである。何か西田について論文を書かないか、というお話を突然或る先生から頂いたに過ぎなかったのである。

大学院に入ってから、西田の著作は折に触れて読んでいた。しかし、読んでもほとんどわからなかった。目の前に立ち塞がるごっこつした崖壁のようで、取り付く鳥もない感じであった。わかりやすいエッセイから入っていろいろという発想はなく、結局途中で放り出すことになった。西田について書かなければならないと感じた。その手が西田哲学と禅の関係について驚いている。

命とするものではないかとおもというものは真に現実把握を生を全く誤解して居るので、禅ではないが元来人は禅というものです。私は固より禅を知るもの。…：昔後に禪的なもの。…と云われるのは全くそうでありか西田について論文を書かないか、というお話を突然或る先生から頂いたに過ぎなかったのである。

います。私はこんなこと不可能ではあるが何とかして哲学と結合したい。これが私の三十代からの念願で御座います」（旧版『西田幾多郎全集』第十九巻、二二四―二五頁）。この一節が重要であることに異論はないが、私にとってはその後に劣らず、その続きが重要であった。「併し君だからよいが普通無識の徒が私を禪などと呼ぶ場合、私は極力反対いたします。そんな人は禪も知らず、私の哲学も分らない。又と云うと同じと云って居るにすぎぬ。私の哲学を誤り、禪を誤るものと思えますから、哲学の立場宗教の立場もこれらだんだん考えて行きたいと思

います。これはどういう意味だろうか。「君だからよいが」というのは、西谷のように禪がわかりやすい研究がある。その手がかりとして誰かが注目するのうことである。西谷のその後、西田が七十三歳のときに西の仕事をみると、確かに彼が禅も哲学も分かっていたことが分かる。禅と哲学の結合というならば、それは西田よりも西谷の仕事のなかに認めることができよう。西谷においては、禅と哲学の関係そのものが思索の主題となり、思索の場となっているように見える。西田はその結合を自分はまだなし得ていないと

考えているばかりか、不可能だとさえ思っている。これは西谷が西田のやり残した仕事をしたいということではなく、西田と西谷は、禅と哲学の結合をそれぞれ自分のやり方で考えていたのではないかと思う。両者は相手ではない別の仕方と考えている。さらに上田閑照先生の見える。また場面を加えて考えると、白い。上田先生の場合、禅と哲学の関係を「自分の人生のなかから掴み出してくる。西谷よりさらに一歩、ご自身の生の現場に踏み込んで禅と哲学の関係を生きている。そのように私は見えます。それでは自分はどうなのか。先生方のような「達人」ではない。「普通無識の徒」である自分はどうこの関係を見たいのか。若い頃には達人に憧れ、なんとかそこに近づきたいと思っていた。しかし老いを感じよう。西田は「普通無識の徒」として開き直りたいと思うようになった。

以前の論文で私は、西田が禅

を哲学的的方法として用いている

ことを批判している。その批判

には、「普通無識の徒」を立ち

上げ司会三名については、候補

者、鏑物美佳氏・安部浩氏【以

上提題者候補】とすることが決

定された。また、シンポジウム

のテーマについても、「純粹経

験」をめぐるものとするところが

確認された上で、板橋氏に一任

することが承認された。

(二) 令和五(二〇二三)年度

年次大会の開催時期と国際

シンポジウムについて

事務局から「二〇三三年十月

には石川県で国民文化祭が開催

されることになっており、同年

七月に国際シンポジウムをも開

催することは難しいかとはく市

は、現今の社会情勢を考慮すれ

ばこれまでどおり性別の記人を

求めることは問題であるという

意見が出され、記入欄を削除す

ることが決定された。助成に関

する細目を整えたいうえで、日P

上で募集を開始することが確認

された。

(四) 編集委員会より

『会報』第十九号編集状況に

ついては、十一月発行を目指し

て編集していくことが確認さ

れた。また、『年報』第十九号

については、刊行から一年後の

電子化(PDF化)ならびに公

開へ向けて対応することが確認

された。更に、編集補佐員は編

集委員会で候補者を立てて決定

また、助成の申請書に関して

は、現今の社会情勢を考慮すれ

ばこれまでどおり性別の記人を

求めることは問題であるという

意見が出され、記入欄を削除す

ることが決定された。助成に関

する細目を整えたいうえで、日P

上で募集を開始することが確認

された。

(五) 事務局より

新たに一名の入会が承認され

た。

また、事務局委託費について

は、従来通りの運営を行うこと

が確認された。

(飯島孝良)

令和四年度第一回理事会

●第二十一回年次大会について

また、助成の申請書に関して

は、現今の社会情勢を考慮すれ

ばこれまでどおり性別の記人を

求めることは問題であるという

意見が出され、記入欄を削除す

ることが決定された。助成に関

する細目を整えたいうえで、日P

上で募集を開始することが確認

された。

(四) 編集委員会報告

秋富副委員長より、年報十九

号が八月一日に発行されること

が報告された。

●事務局報告

(一) 令和三年度決算案および

令和四年度予算案が提示さ

れ、承認された。

(二) 四名の入会および四名の

に企画者グループが個別にテ

アを設定できるパネル発表の場

を設けることが提案され、実現

に向けた課題が協議された。

(猪ノ原次郎)

上田閑照基金について

「西田哲学会上田閑照基金」

の運用が昨春秋から開始されま

した。日Pにその「規約」と「運

用方針」、各種申請書式が掲載

されていますので、ぜひご活用

ください。研究旅費や出版助成

について、若手の方々のみなら

ず、定年後の先生方も念頭に置

いて運用しております。ご質問

等がある場合は遠慮なく事務局

にお問い合わせください。

現在、出版助成一件につい

ての検討が進行中です。西田哲

協議中である旨が会長より報告

された。理事よりいくつかの提

案がなされたが、審議継続と

なった。

●編集委員会報告

秋富副委員長より、年報十九

号が八月一日に発行されること

が報告された。

●事務局報告

(一) 令和三年度決算案および

令和四年度予算案が提示さ

れ、承認された。

(二) 四名の入会および四名の

電子化(PDF化)ならびに公

開へ向けて対応することが確認

された。更に、編集補佐員は編

集委員会で候補者を立てて決定

された。また、『年報』第十九号

については、刊行から一年後の

また、助成の申請書に関して

は、現今の社会情勢を考慮すれ

ばこれまでどおり性別の記人を

求めることは問題であるという

意見が出され、記入欄を削除す

ることが決定された。助成に関

する細目を整えたいうえで、日P

上で募集を開始することが確認

された。

(四) 編集委員会報告

秋富副委員長より、年報十九

号が八月一日に発行されること

が報告された。

●事務局報告

(一) 令和三年度決算案および

令和四年度予算案が提示さ

れ、承認された。

(二) 四名の入会および四名の

電子化(PDF化)ならびに公

開へ向けて対応することが確認

された。更に、編集補佐員は編

集委員会で候補者を立てて決定

された。また、『年報』第十九号

については、刊行から一年後の

電子化(PDF化)ならびに公

開へ向けて対応することが確認

された。更に、編集補佐員は編

集委員会で候補者を立てて決定

された。また、『年報』第十九号

については、刊行から一年後の

電子化(PDF化)ならびに公

開へ向けて対応することが確認

された。更に、編集補佐員は編

集委員会で候補者を立てて決定

された。また、『年報』第十九号

については、刊行から一年後の

電子化(PDF化)ならびに公

開へ向けて対応することが確認

された。更に、編集補佐員は編

集委員会で候補者を立てて決定

された。また、『年報』第十九号

については、刊行から一年後の

電子化(PDF化)ならびに公

開へ向けて対応することが確認

された。更に、編集補佐員は編

集委員会で候補者を立てて決定

された。また、『年報』第十九号

については、刊行から一年後の

電子化(PDF化)ならびに公

開へ向けて対応することが確認

された。更に、編集補佐員は編

集委員会で候補者を立てて決定

された。また、『年報』第十九号

については、刊行から一年後の

電子化(PDF化)ならびに公

開へ向けて対応することが確認

された。更に、編集補佐員は編

集委員会で候補者を立てて決定

された。また、『年報』第十九号

については、刊行から一年後の

電子化(PDF化)ならびに公

開へ向けて対応することが確認

された。更に、編集補佐員は編

集委員会で候補者を立てて決定

された。また、『年報』第十九号

については、刊行から一年後の

電子化(PDF化)ならびに公

開へ向けて対応することが確認

された。更に、編集補佐員は編

集委員会で候補者を立てて決定

された。また、『年報』第十九号

については、刊行から一年後の

電子化(PDF化)ならびに公

開へ向けて対応することが確認

された。更に、編集補佐員は編

集委員会で候補者を立てて決定

された。また、『年報』第十九号

については、刊行から一年後の

電子化(PDF化)ならびに公

開へ向けて対応することが確認

された。更に、編集補佐員は編

集委員会で候補者を立てて決定

された。また、『年報』第十九号

については、刊行から一年後の

電子化(PDF化)ならびに公

開へ向けて対応することが確認

された。更に、編集補佐員は編

集委員会で候補者を立てて決定

された。また、『年報』第十九号

については、刊行から一年後の

電子化(PDF化)ならびに公

開へ向けて対応することが確認

された。更に、編集補佐員は編

集委員会で候補者を立てて決定

された。また、『年報』第十九号

については、刊行から一年後の

電子化(PDF化)ならびに公

開へ向けて対応することが確認

された。更に、編集補佐員は編

集委員会で候補者を立てて決定

された。また、『年報』第十九号

については、刊行から一年後の

電子化(PDF化)ならびに公

開へ向けて対応することが確認

された。更に、編集補佐員は編

集委員会で候補者を立てて決定

された。また、『年報』第十九号

については、刊行から一年後の

電子化(PDF化)ならびに公

開へ向けて対応することが確認

された。更に、編集補佐員は編

集委員会で候補者を立てて決定

された。また、『年報』第十九号

については、刊行から一年後の

電子化(PDF化)ならびに公

開へ向けて対応することが確認

された。更に、編集補佐員は編

集委員会で候補者を立てて決定

された。また、『年報』第十九号

については、刊行から一年後の

電子化(PDF化)ならびに公

開へ向けて対応することが確認

された。更に、編集補佐員は編

集委員会で候補者を立てて決定

された。また、『年報』第十九号

については、刊行から一年後の

電子化(PDF化)ならびに公

開へ向けて対応することが確認

された。更に、編集補佐員は編

集委員会で候補者を立てて決定

された。また、『年報』第十九号

については、刊行から一年後の

電子化(PDF化)ならびに公

開へ向けて対応することが確認

された。更に、編集補佐員は編

集委員会で候補者を立てて決定

された。また、『年報』第十九号

については、刊行から一年後の

電子化(PDF化)ならびに公

開へ向けて対応することが確認

された。更に、編集補佐員は編

集委員会で候補者を立てて決定

された。また、『年報』第十九号

については、刊行から一年後の

電子化(PDF化)ならびに公

開へ向けて対応することが確認

された。更に、編集補佐員は編

集委員会で候補者を立てて決定

された。また、『年報』第十九号

については、刊行から一年後の

電子化(PDF化)ならびに公

開へ向けて対応することが確認

された。更に、編集補佐員は編

集委員会で候補者を立てて決定

された。また、『年報』第十九号

については、刊行から一年後の

電子化(PDF化)ならびに公

開へ向けて対応することが確認

された。更に、編集補佐員は編

集委員会で候補者を立てて決定

された。また、『年報』第十九号

については、刊行から一年後の

電子化(PDF化)ならびに公

開へ向けて対応することが確認

された。更に、編集補佐員は編

集委員会で候補者を立てて決定

された。また、『年報』第十九号

については、刊行から一年後の

電子化(PDF化)ならびに公

開へ向けて対応することが確認

された。更に、編集補佐員は編

集委員会で候補者を立てて決定

された。また、『年報』第十九号

については、刊行から一年後の

電子化(PDF化)ならびに公

開へ向けて対応することが確認

された。更に、編集補佐員は編

集委員会で候補者を立てて決定

された。また、『年報』第十九号

については、刊行から一年後の

電子化(PDF化)ならびに公

開へ向けて対応することが確認

された。更に、編集補佐員は編

集委員会で候補者を立てて決定

された。また、『年報』第十九号

については、刊行から一年後の

電子化(PDF化)ならびに公

開へ向けて対応することが確認

された。更に、編集補佐員は編

集委員会で候補者を立てて決定

された。また、『年報』第十九号

については、刊行から一年後の

電子化(PDF化)ならびに公

開へ向けて対応することが確認

された。更に、編集補佐員は編

西田哲学研究会のご案内

・西田哲学研究会「於京都」
京都の西田哲学研究会は、前年度の再開以降引き続きオンラインで会合を実施しています。従来通り年に四回のペースで、現在は、「一般者の自覚的体系」の終盤に差しかかっています。海外を含め遠方から多数の参加をいただいている一方、常連で参加して下さっていた一部の方に参加していただけないことを残念かつ申し訳なく思いますが、ハイテックス方式での実施可能性を探っているところで、その所在が分からなくなってしまった。石川県西田幾多郎記念哲学館の館長浅見洋と専門員中嶋優太が調査を行い、金沢大学図書館に所蔵されていること

を確認しました。
『善の研究』は、四高での講義録や論文など、複数のテクスタをもとに編まれています。その『善の研究』の原本のひとつである『西田氏実在論及倫理学』はその所在が分からなくなってしまった。石川県西田幾多郎記念哲学館の館長浅見洋と専門員中嶋優太が調査を行い、金沢大学図書館に所蔵されていること

を認認しました。
『善の研究』の第二編、第三編は一九〇六年九月から西田が四高で行った倫理講義の講義ノートを生産たちが印刷したものがもとになったとされています。さらに一九〇七年九月頃に再び印刷されたと考えられています。この『西田氏実在論及倫理学』について、下村寅太郎

・寸心読書会「於石川県西田幾多郎記念哲学館」
多郎記念哲学館
寸心読書会は一九四七年に始まった哲学館で最も伝統のある事業です。例年、年間十回程の子定で西田や京都学派の思想家の著作を読んでいます。二〇二二年度は、金沢大学の山本英輔先生に講師をお願いして、『西田幾多郎講演集』に収録された講演「実在と生と論理」

を読んでいきます。年明け三月頃新たに年間の受講の申込を受け付ける予定です。講義範囲、受講方法、受講料等、詳細につきましては、哲学館エフサイト等をご確認ください。

『西田氏実在論及倫理学』の所感確認について
浅見と中嶋は、茅野氏がこのテクスタを所蔵していたのではないかと考え、茅野良男氏の没後、その蔵書を管理している大分県、竹田市立図書館で調査を行いました。竹田市立図書館は、茅野氏の書庫・書庫「碧山荘」を含む旧宅を保存しており、五十台ほどの本棚を擁する巨大な書庫には、氏のご専門であったハイテガ哲学に関する書籍のほか、日本哲学史関連の資料が配架されており、明治・大正期の日本哲学史の研究にとっても貴重な蔵書群となっています。

『善の研究』は、四高での講義録や論文など、複数のテクスタをもとに編まれています。その『善の研究』の原本のひとつである『西田氏実在論及倫理学』はその所在が分からなくなってしまった。石川県西田幾多郎記念哲学館の館長浅見洋と専門員中嶋優太が調査を行い、金沢大学図書館に所蔵されていること

などが言及しており、その存在は知られていますが所感の情報はありませんでした。これま倫理学』のコピイが見つかり、そこに金沢大学の蔵書印が記されていることから、金沢大学図書館に問い合わせて、同館駒井文庫に所蔵を確認することができました。

『年次大会』における口頭発表の応募について
第二十一回年次大会（二〇二三年七月開催）の口頭発表者（日本語または英語）を公募します。発表希望者は、二〇三三年三月末までに、八〇〇字程度

『西田氏実在論及倫理学』の存在は知られていますが所感の情報は知られていませんでした。これま倫理学』のコピイが見つかり、そこに金沢大学の蔵書印が記されていることから、金沢大学図書館に問い合わせて、同館駒井文庫に所蔵を確認することができました。

『善の研究』の第二編、第三編は一九〇六年九月から西田が四高で行った倫理講義の講義ノートを生産たちが印刷したものがもとになったとされています。さらに一九〇七年九月頃に再び印刷されたと考えられています。この『西田氏実在論及倫理学』について、下村寅太郎

『善の研究』の第二編、第三編は一九〇六年九月から西田が四高で行った倫理講義の講義ノートを生産たちが印刷したものがもとになったとされています。さらに一九〇七年九月頃に再び印刷されたと考えられています。この『西田氏実在論及倫理学』について、下村寅太郎

『善の研究』の第二編、第三編は一九〇六年九月から西田が四高で行った倫理講義の講義ノートを生産たちが印刷したものがもとになったとされています。さらに一九〇七年九月頃に再び印刷されたと考えられています。この『西田氏実在論及倫理学』について、下村寅太郎

『善の研究』の第二編、第三編は一九〇六年九月から西田が四高で行った倫理講義の講義ノートを生産たちが印刷したものがもとになったとされています。さらに一九〇七年九月頃に再び印刷されたと考えられています。この『西田氏実在論及倫理学』について、下村寅太郎

『善の研究』の第二編、第三編は一九〇六年九月から西田が四高で行った倫理講義の講義ノートを生産たちが印刷したものがもとになったとされています。さらに一九〇七年九月頃に再び印刷されたと考えられています。この『西田氏実在論及倫理学』について、下村寅太郎

の要旨と簡単な経歴・業績表を添えて事務局にお申し込みください。

『西田哲学会年報』掲載論文の公募について
『年報』巻末の応募要領にしたがってご投稿ください。たくさん応募をお待ちしております。なお次の第二十一号掲載分は、編集の都合上、令和五（二〇二三）年十月末をもって一つの区切りといたしますのでご了承ください。応募にあたっては、ホームページに掲載の規程と執筆要項をご確認ください。

『善の研究』の第二編、第三編は一九〇六年九月から西田が四高で行った倫理講義の講義ノートを生産たちが印刷したものがもとになったとされています。さらに一九〇七年九月頃に再び印刷されたと考えられています。この『西田氏実在論及倫理学』について、下村寅太郎

『善の研究』の第二編、第三編は一九〇六年九月から西田が四高で行った倫理講義の講義ノートを生産たちが印刷したものがもとになったとされています。さらに一九〇七年九月頃に再び印刷されたと考えられています。この『西田氏実在論及倫理学』について、下村寅太郎

『善の研究』の第二編、第三編は一九〇六年九月から西田が四高で行った倫理講義の講義ノートを生産たちが印刷したものがもとになったとされています。さらに一九〇七年九月頃に再び印刷されたと考えられています。この『西田氏実在論及倫理学』について、下村寅太郎

『善の研究』の第二編、第三編は一九〇六年九月から西田が四高で行った倫理講義の講義ノートを生産たちが印刷したものがもとになったとされています。さらに一九〇七年九月頃に再び印刷されたと考えられています。この『西田氏実在論及倫理学』について、下村寅太郎

『善の研究』の第二編、第三編は一九〇六年九月から西田が四高で行った倫理講義の講義ノートを生産たちが印刷したものがもとになったとされています。さらに一九〇七年九月頃に再び印刷されたと考えられています。この『西田氏実在論及倫理学』について、下村寅太郎

『善の研究』の第二編、第三編は一九〇六年九月から西田が四高で行った倫理講義の講義ノートを生産たちが印刷したものがもとになったとされています。さらに一九〇七年九月頃に再び印刷されたと考えられています。この『西田氏実在論及倫理学』について、下村寅太郎

か、穏やかに質疑が繰り広げられたという印象です。とにかく、一部の皆様と会場でお目にかかれたのは何よりでした。開催にご尽力下さった東京大学の張先生にお礼申し上げます。

『西田哲学会年報』掲載論文の公募について
『年報』巻末の応募要領にしたがってご投稿ください。たくさん応募をお待ちしております。なお次の第二十一号掲載分は、編集の都合上、令和五（二〇二三）年十月末をもって一つの区切りといたしますのでご了承ください。応募にあたっては、ホームページに掲載の規程と執筆要項をご確認ください。

『善の研究』の第二編、第三編は一九〇六年九月から西田が四高で行った倫理講義の講義ノートを生産たちが印刷したものがもとになったとされています。さらに一九〇七年九月頃に再び印刷されたと考えられています。この『西田氏実在論及倫理学』について、下村寅太郎

『善の研究』の第二編、第三編は一九〇六年九月から西田が四高で行った倫理講義の講義ノートを生産たちが印刷したものがもとになったとされています。さらに一九〇七年九月頃に再び印刷されたと考えられています。この『西田氏実在論及倫理学』について、下村寅太郎

『善の研究』の第二編、第三編は一九〇六年九月から西田が四高で行った倫理講義の講義ノートを生産たちが印刷したものがもとになったとされています。さらに一九〇七年九月頃に再び印刷されたと考えられています。この『西田氏実在論及倫理学』について、下村寅太郎

『善の研究』の第二編、第三編は一九〇六年九月から西田が四高で行った倫理講義の講義ノートを生産たちが印刷したものがもとになったとされています。さらに一九〇七年九月頃に再び印刷されたと考えられています。この『西田氏実在論及倫理学』について、下村寅太郎

『善の研究』の第二編、第三編は一九〇六年九月から西田が四高で行った倫理講義の講義ノートを生産たちが印刷したものがもとになったとされています。さらに一九〇七年九月頃に再び印刷されたと考えられています。この『西田氏実在論及倫理学』について、下村寅太郎

『善の研究』の第二編、第三編は一九〇六年九月から西田が四高で行った倫理講義の講義ノートを生産たちが印刷したものがもとになったとされています。さらに一九〇七年九月頃に再び印刷されたと考えられています。この『西田氏実在論及倫理学』について、下村寅太郎